

ヒア・カムズ・ザ・サン

ケープカナベラルの夜風は晩秋だというのに生ぬるく、しかし不快感は感じられなかつた。レジーナはフォンの灯りをたよりに適当な礎石を見つけると砂をはらつて、海のほうを向いてすわつた。ぼくも彼女とおなじように、少し離れた礎石に腰をかけた。

ここ数十年のめちゃくちやな気候変動と温室効果制御で、このあたりの海岸線はすっかり変わつてしまつてゐる。ぼくの尻がいま乗つかつてゐるのも、かつてヴエルナー・フォン・ブラウンの時代に使われてゐた歴史的ななにかなのかもしけなかつた。

カバンのなかから冷え切つたキューバサンド的な物体を取り出すると、ぼくはセブンアップで流しこんだ。食べ損ねていた夕飯をこんなところで食べることになるなんて、思つてもみなかつたな。

フォンのバツクライトを消すと、あたりは星明かりだけになつた。暗がりにだんだん目

が慣れてくる。海に向かつてひらけた東の空には冬の星座が宝石のように輝き、南の地平すれすれにはヤシの木のあいだから、エリダヌス座の一等星アケルナルがちらりと顔をのぞかせている。星空だけはなにも変わらない。少なくとも人類の時間感覚では。

オリオンの左足から少し離れた空を、レジーナがじつと見つめているのに気づく。彼女の視線の先にあるかすかな天体に、ぼくは心当たりがある。

「エリダニ40……あのあたりか」とぼくもその方角を見上げる。「エリダヌス座、グレース先生のお手製プラネットariumにもあつたつけ。——いや、さすがにマイナーすぎるか。サンフランシスコからはアケルナルは見えなかつたし」

「いいえ、ちゃんと載つてたわ。一等星クイズでやつたもの」と静かにレジーナがいう。確信のこもつた口調だ。「あのとき、アビーに先を越されて悔しかつたのよね。でも、その後のあとの星雲クイズで挽回したわ」

「……ずいぶんよく覚えてるな」ぼくは変に感心する。彼女、物静かな印象をもつてたけど、意外と負けず嫌いというか執念深いところがあるみたいだ。

彼女は中学のクラスメイトで、ぼくらはじつに二六年ぶりの再会だった。といつても、

べつにロマンチックな理由があるわけじやない。ここ、旧ケネディ宇宙センターからの打上げを二週間後に控えた、ある宇宙ミッションに関する会合の参加者リストの中に、偶然、彼女の名前があつたんだ。

向こうは、赤外線天文学の終身雇用^{テニュア}の教授。こつちは、去年までバイオ系の怪しいベンチャーを渡り歩いていた貧乏研究員。タウメーバ特需で、ようやくまともなバイオテック企業のポストにありついたばかりだ。しかし、専門分野があまりにちがうせいか、それとも会うなりグレース先生の思い出話で盛り上がったせいか、ふしげとぼくらは一三歳の頃とおなじような感覚で話ができた。

ああ、ちがうんだ。隣の席の女子のノースリーブにどきどきしてたあの頃、とかそういうやつじやない。さすがにそんな甘酸っぱい感覚は、すっかり過去のものになつてしまつている。

なんにだつてなれる気がしてたあの頃。グレース先生が教えてくれる世界の秘密が楽しくてしようがなかつたあの頃。サンフランシスコが平和で温暖だったあの頃。

……うん、ロマンチックというより、むしろノスタルジックだ。

「……いよいよね」と彼女がいう。

「うん」ぼくは発射台のありそうなほうに目をこらしてみる。うんと遠くに、照明に照られた鉄塔のようなものがいくつか見えるけど、どれがそうなのかは判然としない。

早朝から夜までつづくミーティングでへとへとになっていたぼくを、なかば強引にこの海岸に連れてきたのはレジーナのほうだった。話がある、と彼女はいつていた。でも、心当たりがまるでない。

いつこうに切り出してこない彼女を横目で気にしながら、ほぼ空っぽになつたセブンアップの缶をあおる。水滴しか落ちてこない。まあ、たまにはこんな星空の下のピクニックも悪くはないかな。

* * *

ぼくらが八年生だったとき、世界は一変した。正直、それより前がどんな世界だったの

か、あまり覚えていない。

太陽が暗くなつた。太陽から金星に伸びるペトロヴァ・ラインとアストロファージが発見され——タウ・セチの有人探査計画、プロジェクト・ヘイル・メアリーが立ち上がつた。どういう経緯かは知らないけど、中学校でぼくらに科学を教えていたグレース先生が、プロジェクトに引き抜かれてしまつた。困惑していた先生の顔を、いまでも覚えている。まあ、一時の辛抱だろう、打上げが成功したら先生も解放される——ニュースで先生を見かけるたび、ぼくらは気楽にそう考えていた。

先生はもどつてこなかつた。

「ヘイル・メアリー」に先生が乗つてゐる——打上げからずいぶん経つてそれを聞かされたぼくらは、大人つてやつが一瞬で信じられなくなつた。そんなの聞いてない！ しかも往復二六年、乗組員クルは片道旅行という特攻ミッショングだつたんだ——地球に帰れるのはビートルズと名づけられた四機の無人プローブだけで、先生たちは帰れない。全員が志願したのだと説明されたところで、中学生のぼくらにはただの理不尽にしか思えなかつた。

結局ぼくらとはろくに話もできないまま、グレース先生は一二光年のかなたに旅立つて

しまつた。そのままいつしか、ぼくらも大人つてやつになつて久しい。

まあ、人類も二六年間ただ手をこまねいていたわけじやない。異常気象や疫病、軍事衝突に大半のリソースを割かれながらも、人類はけつこうよくやつたと思う。半数が死ぬという悲観的な予想に反し、現状ではなんとか八割程度の人口を維持できている。アストロファージのばかばかしいほどのエネルギー効率を利用することで、最終的な食料の備蓄が予想より上振れしたからだ。

しかしそれは、多くの騒乱や糺余曲折の上に成り立ったぎりぎりの奇跡だ。思い出したくない話も多い。一面の穀物畑は、もう北米大陸には存在しないだろう。オーガニックな合成でない農作物には、ホールフーズ・マーケットでも目玉が飛び出るような値札がついている。ぼくみたいな安月給はウォルマートの代替食材が唯一の選択肢だ。まあ、ジャガイモだけで全人類が食いつないだ一五年前に比べたら、ずうううつとましだけど――

ふと、昼間見かけた、レジーナのジャケットについていたバッジを思い出した。

抽象化されたライ麦の穂の意匠。

「コンソーシアム」のバッジだ、と見るなりすぐに気づいた。人類の希望が託されたロゴ。「レジーナ、そういうえきみは」と彼女にたずねる。「もしかして、大学のほかに〈コンソーシアム〉にも所属してるのか?」

「ええ。ペトロヴァ光観測衛星にかかわってる」とレジーナが答える。

うーん、ぼくは赤外線天文学は完全に素人だ。まあ、そういう衛星があるんだろう。「……ああ、なるほど。すごそうだね」

「地球と火星の間の太陽周回軌道上に一二〇度の間隔で配置されている、三基の赤外線観測衛星のことね」と彼女は補足する。「〈リー・ジエ〉、〈オリーシャ〉、そして〈ライランド〉っていえばわかるかしら?」

ああ、それなら聞いたことが——いや、何度も聞いた。ネット中継のリポーターが、うわざつた声でその名前を連呼していた。あの日、かれらが検知したのは——

ワオ。

「オーケイ……思い出した。思い出したぞ」ぼくは息を呑む。「ビートルズを発見したあ

の衛星か！」

「そのとおり。こんなご時世に天文学をつづけてこられたのも、このプロジェクトのおかげ」と彼女は答える。「もつとも、ここ数年は研究どころじやなかつたけどね」

* * *

そうだった。そもそも〈コンソーシアム〉は、そのために設立されたんだつけ——ぼくは記憶をたぐり寄せる。

太陽系にもどつてくるビートルズを確実に捕捉するため、かのエヴァ・ストラットをはじめとするペトロヴァ・タスクフォースがふたたび集結した。正式名称は忘れたけど、みんな〈コンソーシアム〉と呼んでいる。

国家さえ統廃合される混乱のなかで、かれらは人と技術の散逸を可能なかぎり防いだ。壮絶ともいえる捨て身の努力により打ち上げられた三基のクールな衛星は、あえて財源確保のために〈リー＝ジエ〉、〈オリーシャ〉、〈ライランド〉と名づけられ、タウ・セチの方

向を二四時間見張りつづけた。帰つてくるビートルズが逆噴射するペトロヴァ光をとらえてやろうつて算段だ。地上の深宇宙^D_Sネットワークも、ビートルズからの電波に忍耐強く耳をすませた。

そうしてついに、二六年目がやつてきたんだ。

そこから先は、報道されているとおりだ。

最初にとらえられたのは、光点のほうだった。分光データには、はつきりとペトロヴァ光の特異なスペクトルが写っていた。さらなる精密観測により、ひとかたまりに見えた光点は、三つの点の集まりだとわかつた。

三機だ！ 三機のビートルズが、けなげにもどうにかこうにか太陽系にもどつてきたんだ！ 四分の三。上出来だ。

速度プロファイルから推定された機体質量はなぜか、設計値よりわずかに大きかつた。このときはまだ、謎の偏差だと誰もが思つてたんだよな。

十数日後、深宇宙ネットワークの老朽化した巨大パラボラアンテナが、ビートルズから
バースト的に送信されてくるストレージデータをとらえはじめた。

たちまち全人類が、上を下への大騒ぎとなつた。混迷をきわめた世界情勢も完全に吹つ
飛んでしまつた。

人類には、隣人がいた。それも、たつたの十数年でいけるところに。

しかも、最初にかれらと友だちになつたのは、われらがグレース先生なんだ。

そんなことつて、ある？ 一三歳のぼくが知つたら、いつたいどんな顔をするだろうか。

信じられない話だけど、グレース先生はタウ・セチで異星種属のエンジニアとばつたり
出会つてすっかり意気投合して、ついに解決策を共同で見つけ出したらしい。

ビートルズからは、先生が保存したありとあらゆるデータが次々に送られてきた。ビデ
オ・レター形式の経緯説明にはじまり、日々の日誌、エリディアンという驚異の隣人の生

態や文化、キセノナイトという驚異の物質の物性や加工方法、タウメーバという驚異の……オーケイ、キリがないな。ともかく、たっぷり五テラバイト分の“タウペディア”がそこにあつたつてわけだ。

* * *

「驚いたな……きみがあのビートルズの発見の現場に立ち会つてたなんて」当時の全世界的なお祭り騒ぎを思い出ししながら、ぼくはいう。

「そうね。毎日、新しい発見があつた」とレジーナがいう。「でも、あなただけ、タウメーバ・ファーバーに突然放り込まれたんでしよう?」

「まあね。おかげでぼくもいまの会社に呼んでもらえたから、感謝しなきやな」

前もつてビートルズの全データを電波で受け取った人類は、とんでもないお土産の存在を知つてあわてた。タウメーバのミニ農場だ。ミニ農場は地球一月圏から充分離れたところで、そつと回収された。タウメーバが人類にとつて致死性ではなさそうだとはわかつてたし、もはや惑星検疫プラネットリー・プロテクションなんてあつてないようなものだけど、やっぱり地球にやつらを

野放しにしたくはないからね。これは、科学というよりは、気持ちの問題だ。

そうやつてはるばる旅をしてきたタウメーバたちの子孫を、毎日ぼくは牧羊犬よろしく追い回してすごしている。ぼくが働いているのは、タウメーバ農場の大規模化事業に飛びついたスター・トアップ企業だ。流浪のはみ出し研究者だつたぼくになぜ声がかかったのか、さっぱりわからない。グレース先生の昔の論文を、世界でいちばん読み込んでた自負だけはあるけど。

数カ月前からは金星へのタウメーバの制御播種も開始されていて、ぼくもやることがさらに増えた。

「『イエロー・サブマリン』の調子はどう?」と彼女がたずねる。金星周回軌道に投入された、急ごしらえのタウメーバ播種船の愛称だ。金色のサーマルブランケットで覆われた巨大なタウメーバ・タンクは、たしかに潜水艦っぽく見える。

「いまのところ、効果は抜群だよ」とぼくは得意げに答える。「なにしろアストロファージの『巣』を根こそぎたたいてるからね!」

「まるで害虫の駆除剤ね。……こちらの観測でも、ペトロヴァ・ラインはすっかり暗く

なってるわ。太陽の光度も九七パーセントまで回復してる」

「ワオ。最高のニュースだ」とぼくはいう。地球環境や世界情勢が落ち着くには、まだあと何十年もかかるだろう。でもぼくは、人類がなんとかここまで来たことを、素直に喜びたいと思つた。

「ええ」と彼女もいう。

彼女のほうをちらりと横目で見る。星明かりのもとでは、彼女の表情も意図もよく読み取れない。ひとりで興奮していたぼくとちがつて、やけに淡々としている。うーん、ぼくは彼女のいいことに近づけているんだろうか？

ぼくらの共通体験はなんだ？——科学だ。グレース先生の科学の授業だ。

だからきっと科学が核心に導いてくれる——根拠のないそんな直感が、ふと浮かんだ。ひとまずはそれを信じてみるほかなさそうだ。

* * *

「ドップラー効果って習つたじやない？　八年生のときだつたかしら」珍しく、レジーナ

のほうから話題を振ってきた。

ぼくらはとりとめもない会話をつづけていた。夜の闇は深くなっている。潮の匂いも少し濃くなつた気がする。いつのまにかアケルナルは地平線に隠れ、冬の大三角も西のほうに傾きつつあつた。

「覚えてるさ。科学博物館エクスプロラトリウムの校外学習のとき、グレース先生が説明してくれたんだつたな。ダウンタウンの緊急車両のサイレンを題材にして」

あの授業を受けてから、怖かつた夜中の遠いサイレンがむしろ楽しくなつたのを、ぼくは思い出した。

「ええ。サイレンが近づくときは音が高く聞こえ、遠ざかるときは低く聞こえる」

「そうだな。それが、どうしたんだ?」

「ヘリー・ジエのことなんだけど」彼女は唐突に、ペトロヴァ光観測衛星の話をはじめた。「ビートルズが帰ってきてからは、太陽系のペトロヴァ・ライン観測用に転用していのよね。だけど、ちょうど去年のいまごろだつたかしら、ふと思いついたの。久しぶりにタウ・セチの方向に向けてみようかなって」

「タウ・セチのペトロヴァ・ラインを見るために？」

「さすがにそれは無理」と彼女がいった。「星系全体が一ピクセルに収まってしまうし、實際タウ・セチの観測結果は、なにも変わらなかつた。……ところがタウ・セチから数十分角のところに、光点が写つたのよ。画像解析AIがようやく検出できるくらいの、かすかな光点が」

「ぼくは眉をひそめた。天文学の話をされたところで、ぼくは完全に専門外だ。『光点だつて？ ビートルズを観測していた頃にはなかつたのか？』

「ええ、過去のデータをぜんぶ探してみたけれど、そんな光点はなかつた。わたしたちが目を離していた数カ月のすきに生まれたことになる」

「遠くの銀河の超新星という可能性は？」誰でも思いつきそうな、まぬけな質問をしてみる。

「ありえない」思つたとおり、即座に彼女は否定した。「だつて、ペトロヴァ・スコープよ。单色のペトロヴァ光だけを抽出するように設計されてるもの。超新星ならスペクトルは单色じやないから、自動的に除外される」

ぼくは肩をすくめる。「なるほど」

でも、それならいつたい、なんだつていうんだ？　ぼくに当てさせたいのか？　それとも——なにかをためらっている？

しばらく静寂がつづいた。

「オーケイ、降参だよ、レジーナ」ぼくは白旗を上げた。

彼女の溜息が聞こえた。「まだわからぬい？」

「そういわれても、ぼくは天文学は素人だよ」

「天文学の問題じやないわ。工学よ」

「え？」

「あれほどのエネルギー量と単色の赤外スペクトルは、自然現象ではありえない」彼女はつづける。「あきらかに、大量のアストロファージをエネルギーに転換したときにはのみ出る人工的な光よ」

人工的——だつて？

待つてくれ。

「まさか」ぼくは呻いた。

レジーナ、ひよつとして。きみがいいたいのは。

「もしかして……〈ヘイル・メリ〉のエンジンの光が、太陽系から見えた……？」

「そういうこと」彼女の返事は素つ気なかつた。
ワオ。なんてことだ！ 信じられない。〈ヘイル・メリ〉が光学的に見えただけつて？！

そんなニュース、聞いたことないぞ。

「うわあ」ぼくは頭を抱える。「だつて、一二光年先だよ?!」

「ここ一〇年のペトロヴァ分光学の発展をご存じない？」

オーケイ……そだつた。あの頃の人類は生き残るために必死で、ペトロヴァ光オタクみたいになつていたんだつた。絶対にビートルズをとらえようと、なげなしのリソースを全部、ペトロヴァ光の検知技術につぎ込んだんだ。そして、そのクレイジーな技術の先鋒にいたのが、まさに彼女なんだつた。

「それに、フル・スラスト時のスピンドライヴから出る赤外放射のエネルギー量は、太

陽表面を数桁は凌駕するわ」彼女はつづける。

「うへえ」とぼくはふたたび呻く。「うつかり当たつたら、ナノ秒で宇宙の塵になるだろ
うな」

太陽より明るいなら、見えてもおかしくない気がしてきた。

レジーナは置み掛けてくる。「ヘイル・メアリー」のスピンドライブの幅はたかだか十数メートルしかない。だけど、ペトロヴァ光に特化した検出器と補償光学系を持つ〈リーギエ〉なら、原理的には検知可能な。系外惑星の直接観測に比べたらずつと楽ぼくの脳味噌はキヤパオーバーで煙を噴きそうだ。どうどう、落ち着け脳味噌。まだそ
うと決まつたわけじやない。たとえば——ペトロヴァ光を出すのはヘイル・メアリー
だけとはかぎらないんじやないか?

「ちよつと待つた。エリディアン側の船の光つていう可能性は?」とぼくはたずねる。

「それは考えた。でもかすかな光度変化を見てみると、きつかり四秒ジャストのサイクルで出力が制御されているように見えたの。人類とは異なる時間単位を持ち、六進法を使う種属がつくつたエンジンが、秒単位で動いているとは考えにくい。あれはやっぱり人類が

つくつたものだ、とわたしは結論づけた」

「うーん……理屈は合うね」レジーナの優秀さに、ぼくは舌をまいた。

ふと、八年生の科学の授業を思い出した。実験中だけ盛り上がるほかの生徒たちとはちがつて、レジーナは実験後の雑多なデータを粘り強く解析するのが得意だった。解析結果をことさら自己主張しないところも、いまと変わらなかつた。

「驚くべき発見だな」とぼくはいう。だが同時に、ぼくの勘が告げている。

たぶん、彼女の話はまだ核心にたどりついていない。彼女がほんとうに伝えようとしてるのは、きっとその先だ。

ドップラー効果の話は、まだ終わっていなかつたんだ。

「だけど、その」ぼくは口ごもつた。「ペトロヴア・スコープで光が見えたっていうことは……」

ビートルズ帰還の全世界的な祝祭から約半年後、〈コンソーシアム〉から唐突に発表されたニュースを、ぼくは思い出していた。全人類に衝撃を与えたその緊急プレスリリースは、たしか今年の二月だった。

レジーナの観測は、それより数カ月も前つてことになる。

「もしかして、きみは……世界ではじめて気づいてしまったんじやないのか。〈ヘイル・メアリー〉のペトロヴア光が」

恐る恐る、彼女にたずねる。ぼくは闇夜に感謝する。もし彼女の表情が見えていたら、ぼくはこの質問を彼女にできただろうか？

「——赤方偏移してることに」

少し間を置いて、「……正解よ」と静かにいうレジーナの声がきこえた。

光つてやつはじつに雄弁なものだ。残酷なまでに。

波の発生源が遠ざかると波長が長くなるんだ、ほら、サイレンが低く聞こえただろう？

——グレース先生の快活な説明を思い出す。

光も一種の波だ。光の波の場合、遠ざかると色が赤い側にずれる。これが、赤方偏移だ。レジーナによると、〈ヘイル・メアリー〉の噴射光に赤方偏移が見られたという。

これが意味するところはひとつしかない。

グレース先生を乗せた「ヘイル・メアリー」は——地球から遠ざかっている。

いまとなつては誰もが知る事実だけど、あの当時、それに気づいていた人間は皆無だつた。

なにしろ、ビートルズに保存されていたグレース先生の日誌には、こう書かれてたんだ
——燃料が手に入ったから、「地球上に帰れる」つて！

全人類が、この記述に色めき立つた。

先生の日誌は、異星のエンジニア“ロツキー”と別れたあとのビートルズ発進準備の記述で終わつていた。だからてつきり先生はビートルズを行かせて、あとからゆつくり帰つてくるんだろう、とぼくは思い込んでいた。ぼくだけじやない。（コンソーシアム）でさえ、当時はそう推測していたのだ。なにしろ船は満身創痍だ。一刻も早くタウメーバをぼくらに手渡すためにビートルズを切り離して先に五〇〇Gで飛ばしてくれたのだろうというのが、かれらの解釈だつた。

だからぼくらは、ビートルズだけが太陽系にもどつてきたことに、なんの疑問も持たな

かつた。一・五Gで加減速すれば、〈ヘイル・メアリー〉は来年の春には帰つてくる。それが〈コンソーシアム〉の計算結果だつた。

人類は完全に浮かれていた。

今年二月の〈コンソーシアム〉の緊急プレスリリースで公表されたひとつのテキストファイルが、グレース先生の計画変更をぼくらに突きつけるまでは。

でも、それより数カ月も前に、彼女は見てしまつたんだ。

先生が遠ざかっていく決定的な証拠を。ぼくらの絶望を。おそらく人類ではじめて。直接、その目で。

いつたいどれほどのショックを、彼女は受けたのだろうか。

* * *

ぼくの心配をよそに、レジーナは淡々と話しつづける。「もつとも、遠ざかつてるといつても、太陽系から見ると〈ヘイル・メアリー〉の進行方向は約八二度傾いている。ほ

「ぼくは真横に進んでることになるわ」

「真横？　じゃあ噴射光もほとんど見えないし、ドップラー効果も出ないんじやないか？」

「ええ、ダウンタウンの緊急車両のような遅い物体ならね。でも真横に運動する物体が光速に近づくと、側面がこちらから見えるようになる。テレル回転つて知ってるかしら？」

むしろ彼女は、さつきより饒舌なくらいだ。うーん、特にショックは受けなかつたのかかもしれないな。科学者らしいドライさだ。

「いや、聞いたこともないな」とぼくは正直に白状する。

「速度が〇・九c付近になると、船尾を約六〇度こちらに向けたのとほぼおなじように見えるの。ペトロヴァ光の場合は相対論的ビーミングも加味されるわね。それに、横方向の相対論的ドップラー効果も無視できなくなつてくる」

「そんなものがあるのか」相対論の話を聞くといつも、なにかだまされていくような気分になる。「……あれ、待てよ。ペトロヴァ波長の光以外は写らないっていつてなかつたつけ？　赤方偏移した光でも検出できるのか？」

「それは織り込みずみよ。〈リー＝ジエ〉のペトロヴァ・スコープは、検出波長域を微調

整できる」とレジーナが答える。「だって、ビートルズの噴射光もドップラー効果の影響を受けるわけだから」

「なるほど、そりやそうか」

レジーナの論理には一分の隙もない。

「もつとも、限界はあるわ。いまはもう船の加速が進んで、ペトロヴァ・スコープの観測可能波長域を超えてしまった。おそらく来年には、宇宙マイクロ波背景放射^cに埋もれてしまってでしょうね」

「去年だつたからぎりぎり気づけたってことか……。きみは強運の持ち主だな」ぼくは感嘆した。「いつたいどういう経緯で?」

「いちばん最初は、ペトロヴァ光よりも短い波長、近赤外光を検出しようとしてたの。でも何も写らなかつた——だからトラブルシュートのために、いろんな波長で撮つてみた。そうしたら逆に長い波長、遠赤外で撮つた画像に、たまたま光点が写つたってわけ」と彼女は自嘲気味にいった。「笑つちやうわ。近赤外なんて、写らなくて当然よね」

笑つちやうわって、どういうことだ? ……いや、それよりも、なにか引っかかる。

「短い波長……？」

近づいてくる物体が発する波の波長は、短くなるんだ——またしても、グレース先生の声が脳裏にこだまする。光なら、青い側にずれる。

「ああ……。青方偏移、ってことか……」思わずぼくは喘ぐ。「ヘイル・メアリー」が、近づいてくることを想定してたんだな、きみは……」

「ええ。ほんと、ばかみたい」彼女はどこか悔しさをにじませた口調で、ぼくの推測をふたたび肯定した。

ぼくは言葉に詰まる。

レジーナは気まぐれに〈リーエジエ〉をタウ・セチに向けたわけじゃない。完全に最初からヘイル・メアリーの撮像を狙つて、用意周到に準備していたんだ。

船がこちら側に向かっている——先生がもどつてくる——と期待して、その速度まで考慮して。

「ばかなものか。あの頃は世界中のだれもが、船が帰つてくると思つていた。あの報道よ

り前に、真相に気づいたってだけでもすごいよ」こんなとき、ぼくは月並みな言葉しか思いつかない。

「ありがとう。そうね、運がよかつたんだと思つてる」

「ちがう。強運のおかげじやない。彼女の慧眼以外のなにものでもない。

「ビートルズのあとを追いかけてきているなら、もうとつくに減速フェーズの光が見えていいはずなのよ」と彼女がいった。「仮にタウ・セチとたまたま重なつていたとしても、ペトロヴア光観測衛星の年周視差があれば三基とも見えないわけはないはず。なのに、青方偏移した光は写らなかつた。——周囲は、ヘイル・メアリーに最悪の事態が起こつたのだろうと解釈したわ。もともとそういうミッショングリだつたのだから、気落ちするなつて」彼女の口調からは静かな怒りが伝わってきた。

「そんな」ひどいことをいうやつらがいるものだ。

「ありえないと思つた」

「だよな」ヘイル・メアリーの生存を微塵も疑わなかつた彼女の信念に、ぼくは心のなかで喝采を送つた。

「絶対に見つけてやると誓つたわ。退役したストラットに直接かけあつて、こつそり観測

機会を割り当ててもらつた。ぜんぶの波長を試してみたら、遠赤外画像に、赤方偏移した光点が写つた」彼女はだんだん早口になつてきた。「まさかと思つたわ。設定を間違えたのだろうと思つた。でも何回撮像しなおしても、結果は変わらなかつた。だから、なにかほかに見落としがないか必死に探したの。タウペディアとビートルズを洗いざらいね。——で、昨年末にようやく見つけたのが、例のあのメモ」

「あのメモって——まさか」

さらつととんでもないことをいわれた氣がする。

「もしかして、グレース先生の——」ぼくは絶句する。

「そう。緊急プレスリリースで公表されたあれね」

今年の二月、全世界が騒然となつた隠しファイル。通称、グレース・メモ。タウペディアの全データのなかで、タイムスタンプが最新のテキストファイルだ。ぼくらは眞実をこのとき知つた。

急いで書かれたらしいそのテキストファイルには、たつたの数行、グレース先生が“友人”を助けるために急遽エリダニ40星系に向かうこと、地球にはもどらないことにしたが

心配しないで欲しい、というようなことが、彼なりのいつものユーモアをもって簡潔に記されていた。ぼくもいまだに全文をそらでいえると思うし、「コンソーシアム」の緊急記者会見でそれを読み上げたストラットの思い詰めたような表情がいまでも忘れない。

「あれを見つけたのも、きみなの?!」驚きすぎて、感覚が麻痺してきた気がする。

「ええ。光点や赤方偏移の件は結局公表していないから、あのメモだけが世間的には唯一の物証ということになるわ」

「ワオ……まさにワオだな」ぼくはうなつた。

「これも運がよかつただけ」と彼女がいった。「赤方偏移のことがなかつたら、いまでもメモに気づいていなかつたかもしね。なにしろファイル名が“新規テキストドキュメント.t xt”だつたし」

「うわあ。それはひどいな。ぼくなら確實に見落とすよ」

「しかもタウペディアが入ったRAIDアレイとはべつの、USBメモリの中には。ビートルの内壁に緩衝材ごとダクトテープでぐるぐる巻きに固定されて、『ここを見ろ!』

つてペンで書いてあつた

「物理的に搭載されてたの?!」

「ええ。電気的には切り離されてた。だからビートルズの送信データには含まれてなくて、ずっと見落とされていた」

「……うわあ」

なんてことだ。

彼女がそれを見つけてくれなかつたら、ぼくらは今までのんきにヘヘイル・メアリー〉の帰還を待ちつづけていたかも知れないってことか。考えるだに恐ろしい。

全人類はいますぐ全力で、彼女の緻密さと執念深さに感謝しなくちやならない。

でも、ぼくの知るかぎり、グレース・メモの報道発表にレジーナの名前は出てなかつたと思う。あくまで〈コンソーシアム〉としてのプレスリリースだつたはずだ。〈リーギエ〉のデータにいたつては赤方偏移どころか、ペトロヴァ光が見えたことすら公表されていない。

「いやはや、すごいなんてもんじやない。とんでもないよ。きみの成果は正当に評価され

るべきだ。もっとアピールしたつていいんじゃないかな。ひどいことをいつたやつらの鼻もあかせるだろう?」

レジーナはしばらくだまつていた。

「ぼくからも〈コンソーシアム〉にひとつこと――」

彼女の小さな溜息が聞こえた。「ありがとう――でも、いいの」

「……レジーナ?」

「あのメモを読んで、わたしがどんなに狼狽したか――あなたならわかるでしょう? だって、ほかの動画や日誌では、これから帰るつていつてたのよ!」

彼女の口調がやや冷静さを失いつつあるのに、ぼくは気づいてしまつた。

「先生はいつてたわ。ロツキーから燃料を分けてもらえることになつたんだ、つて。ほんとうにいいやつだつて。これなら地球にもどれそだから、どうかみんな、無事でいてくれつて」

「ああ……」ぼくはばかだ。無粹だった。

「サンフランシスコの海と空と坂道が恋しいつて。いつかもう一度サリーズ・ダイナーの

ツーエッグコンボをオーバーミディアムで、奮発してパンケーキもつけるんだって」

ぼくは拳を強く握りしめる。彼女の絞り出すような言葉を、だまつて聞くことしかできない。

「授業、途中で抜けてきてしまったから、もう一度ちゃんとやらないとなつて。最後はとつておきのタウ・セチ早押しクイズをやるから、準備しておけよつて……！」

* * *

そうだ。ほんとうに、レジーナのいうとおりだ。

退屈な中学校生活のなかで、いちばん楽しかったのがグレース先生の科学の授業だった。一三歳という多感な時期に、先生の授業とその後の顛末を間近で見ていたぼくらの人生が、影響を受けないわけがない。

先生は知らないだろうけど、あのクラスから科学技術^{SCIENCE}の分野に進んだやつは、ほんとうにたくさんいるんだ。レジーナとぼく以外にも、アストロファージ発電のトラン、温室効

果制御のテレサ、自然酪農を復活させたアビー、「コンソーシアム」を率いるハリソン……。残念ながらクラス全員がいまでも健在というわけじゃない。ぼくらはきびしい時代に生きている。それでもみんな、グレース先生の「遺志」を継いでなんとか人類を立て直そうという一心で、それぞれの分野で必死に頑張ってきたんだ。

だからグレース先生が地球に凱旋すると知つて、ぼくらがどれほど驚き、喜びに沸き立つたことか！ タウペデイアに収録されていた先生の帰投^{R T B}に関する一連のメッセージ、なかでも、かつての教え子に宛てたあの特別なビデオ・レターは、ぼくらにとつて最高のサプライズだった。

レジーナもまた、グレース先生の影響を受けて人生を決めたひとりにちがいない。

彼女はもしかすると、ビートルズだけがもどつてきたことをいち早く不審に思つたのかもしれない。「コンソーシアム」さえ浮かれているなかで、「ヘイル・メリーリー」がほんとうに遅れてもどつてくるのか、冷静に把握しようとしたのだろう。しかし、彼女の期待は完全に打ち砕かれた。光の波長は青い側じやなくて、赤い側にずれていた。船は近づくど

ころか、遠ざかつていた。

彼女がこの大発見をなぜ自分の名前で大々的に公表しなかったのか、それはわからない。でも、きっと彼女は相当悩んだんだろう。自分の観測データの正当性は、彼女自身がいちばんよく知ってるはずだ。だからこそ、それが疑念を決定的なものにしてしまうのが——自分がその最大の貢献者となってしまうのが、耐えられなかつたのかもしれない。

それでも結局、彼女は科学者として誠実に、傍証を探した。そして見つかつたグレース・メモが、彼女の希望にとどめを刺した形になつた。観念した彼女は歴史の表舞台に立つことを選ばず、すべてを「コンソーシアム」に委ねたのだろう。

もしもグレース・メモの発見がなかつたら——周囲の下馬評のとおりに「ヘイル・メアリー」は消息不明扱いになつていていたかもしだれない。それに比べれば全然ましなのはたしかだ。少なくとも船は生きていて、四秒サイクルで出力を制御しながらエリダニ40に向かっている。グレース先生の望んだとおりに。だから客観的には決して悪いニュースではない。

実際に世間の大多数は先生の決断を英雄的行動として受け止めている。

でも、彼女の落胆は痛いほどわかる。

だつて、ぼくだつてそうだつたんだ。

先生が帰つてくるはずだつた来年の春が、待ち遠しくてしかたがなかつた。伝えたいことも聞きたきことも、山ほどあつた。

だから、先生が帰つてこないと知つたとき、ぼくもほんとうにショックだつた。ショックすぎて、滅菌したばかりのピペットチップの箱をぜんぶひっくり返してラボでわんわん泣いた。

ファイル名に文句をいえる筋合はない。だつてタウペデイアのほかのファイル群はきちんと整頓され、インデックスまでついていたからだ。よっぽどの状況だつたつてことは容易に推測できる。

先生はきっと、地球に向かおうとする途中でエリディアンの友だちの危機を知つたのだろう。グレース・メモのタイムスタンプを見るかぎり、軌道力学的にいつて後もどりでき

るタイミングぎりぎりだつたにちがいない。ビートルズはいつでも放出できるようにな
ンバつてて、RAIDアレイへのレイトアクセスは無理だつたのかもしれない。急いで
メッセージを書いてその辺のUSBメモリに保存し、ダクトテープでビートルズの中に貼
り付けて、地球に向けて飛ばしてから、友だちを助けにもどつたのだろう。

グレース先生のやつたことは、正しい。圧倒的に正しい。

先生は、友だちと世界とを同時に救つてのけた。

ぼくだったら、とっさにそんな判断ができるだろうか？ うじうじと悩んでいるあいだ
に、友だちを助けるチャンスもビートルズを放出するチャンスも失つてしまふんじやない
か？ そう、まるで、いまのぼくみたいに。

* * *

「だからなのよ。……だからわたしは志願したの。ラテラルバス・ミッショントレジーナの声ではつとわれに返る。なきなく感傷にひたつていたぼくをよそに、彼女の声はもう、持ちまえの冷静さを取りもどしていた。

横ラテラル向きのバス。

劣勢のアメフトチームによる起死回生の大遠投バス、それがヘイル・メアリーだ。でもそんなプレーは文字通り、神頼みのやけくそバスだ。本来、クオーターバックは多彩なパスプレーを繰り出す。ラテラルバスなら、試合中に何回だって投げていい。

タウ・セチに挑む一か八かのヘイル・メアリージャなくて、横にいる“隣人”に向けたバス。エリダニ40に向けて何度も投げて、ともにゲームをつづけていくためのバス。人類の新しい恒星間往還ミッション、ラテラルバスだ。ほんとうはもつと長くて堅苦しい名前なんだけど、〈ヘイル・メアリー〉のアメフト趣味にあやかつてぼくらは勝手にそう呼んでいた。

彼女はひと息おいて、つづける。「太陽光度の情報がエリダニに届くのは、いまから一六年後。その頃にはたぶんグレース先生は、五〇代になつているはず」

「うん。エリドは高重力だし、さすがに身体にもガタが来ているだろうな」とぼくはいう。

「そうね。だから、もうもどつてくる気はないんだと思う」彼女の横顔が、シルエットだけ見える。「電波でもこちらの情報をエリダニに向けて送信しつづけているけど、やつぱり一六年かかるし、最大出力でもエリドの濃く濁った大気の底に届くかどうかはわからな

い」

「逆もおなじだな。仮に先生がエリダニからこちらに情報を送つてくるにしても、一六年だ」実際、地球から見えるエリダニ40の光度は、まだ回復していない。

「長すぎるのよ。わたしはいまから何十年なんて待てない」と彼女がいつた。「だから、グレース先生に直接会いに行く。先生が元気でいるうちに」

レジーナの声には、たしかな熱量があつた。

「わたしが見つけたくそいまいましい赤方偏移を、少しでも追いかけて打ち消してやるの。

* * *

たぶん、近いことを考えたやつらが世界中にたくさんいたんだと思う。ただし、彼女よ
りはもうちよつと実務的な理由で。

ビートルズのデータから紐解くかぎり、人類とエリディアンは今後も宇宙の友人として
うまくやっていけそうな気がする。だが往復三五年という距離はあまりにじれったい。グ
レース先生に通訳をやってもらえるうちに人類が訪問しないと、いろいろとまずい。少な
くともぼくは、先生なしにまつたくうまくいく気がしない。

早く行動すればするほど、お手玉がもらえる——早押しクイズで学んだ、宇宙の普遍的
真理だ。先生に残された時間はかぎられている。ぼくらはエリディアンより寿命が短くて、
せつかちで、衝動的な種属だ。それにこの好機を逃したら、人類は外宇宙より内政を優先
するようになるだろう。

だから、いまから使節団を複数回に分けてエリドに送る——ラテラルパス・ミッション

だ。そのための船のパートの一部が、二週間後、この浜辺からはじめて打ち上げられる。八ヶ月かかる軌道上組立の最初の一歩だ。

レジーナはみごと、第一便のメインクルーに選ばれた。ぼくはといえば、まあ、バツクアップクルーだ。そして第一便が出発したら、すぐさま今度は第一便のバツクアップクルーが第二便のメインクルーになつて、出発準備にかかる。太陽系とエリダニ40との位置関係から、出発のチャンスは年に一回。つまり、ぼくもレジーナの一年後には、彼女たちを追いかけていくことになる。

いまのぼくはもう、グレース・メモを見て大人げなく泣いたりしない。むしろ、先生の的確な判断と友情を誇りに思つてゐる。エリドを訪れた最初の人類が先生でよかつたと、心から感じてゐる。

でもレジーナはきっと人一倍、この使節団にかける思いが強いんだ。

彼女は赤方偏移の第一発見者だ。だからこそ、その存在が許せないのだろう。自分の手で物理的にそれを打ち消したい気持ちはすごくわかるし、彼女にはその権利があつてしま

るべきだ。

それに彼女がぼくにこの話を打ち明けてくれたことは、ちょっとうれしかったんだ。ともにグレース先生に学んだ同志として、だ。レジーナの成果はもつと広く知られるべきだけど、いまは彼女の気持ちを尊重して、ぼくらの秘密にしておこうと思う。

「ぼくもだいたいそんなところだ。先生に会いにいく最後のチャンスだと思つてね。——
その、さつきはごめん。無神経なことをいった」

すでにぼくらは、人生の折り返し地点にいる。船内時間は片道四年半だけど、地球に残していく家族や友人たちには三五年間の留守番を頼むことになる。それも覚悟のうえだ。

長期昏睡は使わない。あまりに危険な賭けだ、と「ヘイル・マアリー」のヤオ船長とイリュヒナが身をもって教えてくれた。それにこれはもう、特攻ミッションじゃない。投げたバスはもどってくる。

「おなじ教え子として、きみの落胆も覚悟も心から共感する。でも、その情熱には負けたよ。強いな、きみは」ぼくは素直に彼女のタフさを称賛する。持てる科学のすべてをつぎ込んで先生に追いつこうとしている彼女の意地を。「きみは選ばれるべくして選ばれたん

だと思う。まぐれで採用されたぼくとは大ちがいだ」

彼女の視線がこつちを向いたように感じた。

「いまさら、なにを謙遜してるの。いまや、あなたは世界の比較宇宙生物学を牽引している。先生の研究を正しく継承した、タウメーバの第一人者でしょう。胸を張つてよ」

それは買いかぶりすぎだ。比較宇宙生物学は生まれたばかりの新しい分野だから、ぼくみたいな平凡な研究員でも世界の最先端で仕事ができるってだけだ。

「オーケイ。ありがとう、レジーナ」とぼくは肩をすくめる。「まあ、ぼくの数少ない武器だしね。これがなくなったら、あとはマッケンチーズづくりくらいしかやれることがなくなってしまう」マッケンチーズは、ぼくがつくれる唯一の料理だ。マカロニもチーズも、いまはまだ代替品だけだ。

「あなた、なんだかグレース先生に似てきてるわよ」とレジーナが苦笑いする。

「ワオ。どのへんが?!」まんざらでもない。いや、正直にいおう。めちゃくちやうれしい。先生はぼくのヒーローであり、憧れだつたんだ。にやつきがおさえられない。「顔?……じやないよね」

「しゃべり方とか、ものの考え方とかね。タウメーバと毎日じやれ合っているとこういう

感じになるのかしら?」

「培養のたびに、ぼくのかわいいタウメーバたちに声をかけているからね。オーケイ、みんな、きょうは分裂してみよう! いちばん早く増えたチームがお手玉獲得だ! ってね」グレース先生の口調をまねてみる。⋮⋮おつと、スペつたかな。レジーナの表情はまだよく見えない。でも、ちよつと笑つたような気がする。

それにぼくが日々こんな感じでタウメーバを扱っているのは、ほんとうのことなんだ。

先生の科学の授業で感じたわくわくに突き動かされて、ぼくはいま、ここにいるのだから。レジーナもきつと、そうなんだと思う。

「——先生はずつと、ぼくの理想だった。かなり影響されてるのは否定できないね」ぼくは肩をすくめる。

「じゃあ、あなたもきつと、よい先生になれるわね」

「そうかな」

「わたしたちは、グレース先生のことを直接覚えている最後の世代よ。それを次の世代に伝えていくのも、わたしたちの仕事。先生の、ものの考え方も含めて、ね」

レジーナはそういうと、天文薄明が終わろうとしている東の空をだまつて見すえた。大西洋と空の境界がうすぼんやりと白みを帶び、季節外れの春の星座は輝きを失いはじめていた。

まもなく、地球にいちばん近い恒星が、今日も水平線の向こうから昇つてくるだろう。九七パーセントまで復活した白色光が、この小さなバイオスフィアを満たすだろう。

不意に頭の中で、穏やかなギターのイントロが流れだす。四機のビートルズのうち、〈ジョージ〉の送信データのプリアンブルに仕込まれていた、百年近くも昔の曲だ。きっと設計者のいたずらだろうな。データ受信のたびに、人類が飽きるほど聴かされたフレーズ。かつて、宇宙のどこかの“隣人”に向けて、探査機ボイジャーのゴールデンレコードに収録されるはずだつたナンバー。

「太陽が昇つてくる」口の中でそつとつぶやく。「もう、大丈夫だ」

人類とぼくらの太陽はきっと、もう大丈夫です、ライランド・グレース先生。
もしかすると〈ジョージ〉からのブロードキャスト信号は、遠くエリドにも届いてるの

かもしれない。それでも、ぼくらはその言葉を直接会って伝えたいんだ。先生とその友、ロツキーに。

風が凧ぎ、気の早い海鳥の群れが、遠くでにぎやかに鳴きはじめる。長く暗い夜がようやく明けようとしているのを、全身で感じる。

いつか、和音と音符で話すぼくらの最初の隣人たちはこの曲を聴かせたら、いまのこの感覚をわかつてもらえるだろうか。

そんなことをぼくは徹夜明けの頭で、ほんやりと考えた。

(了)